共同研究グループ活動報告（2011 年度）

日中関係史

11 年度の活動は，10 年度と同様，関連する内容のうち，プランゲ文庫と東アジア，中国人日本留学史については共同研究奨励助成の方で，中国における日本租界については非文字資料研究センターの方で研究会かシンポジウムを開き，さらに，本学をあげて取り組んだ 11 月 5，6 日の辛亥革命 100 周年記念シンポジウム「辛亥革命とアジア」（清華大学，中国史学会との共催）の準備に協力したために，グループ独自に活動することをしなかったのは遺憾なことであった。

いつも反省ばかりであるが，新年度はグループ員間の活発な研究交流を期したい。

（大里浩秋）

「文化のかたち」研究グループ活動報告

［活動内容］

4 月に研究会を開き，今年度の当研究会の叢書刊行を目指して「グローバル化の中の日本文化（仮）」のタイトルで原稿募集の依頼を行った。

5 月に集まった原稿 10 点をもとに，2 名の編集委員と共に，最終原稿完成までの執筆予定を決定した。

6 月に叢書の出版元の選定を協議し，9 月 1 日を最終原稿提出日とすることを確認した。

9 月 1 日になって，まだ 10 名分の提出原稿が揃わなかったため，デッドラインを 1 カ月延期することにした。

11 月 1 日になって，原稿がほぼそろったので出版元と交渉したが，時期的に間に合わせられない旨の返事をもらった。そこで出版元を変更し，執筆陣を 8 名にして最終的に御茶の水書房から出版の承諾を取り付けた。

12 月 30 日に初稿が配布され，8 名の各執筆者は校正プロセスに入った。

1 月 5 日に編集委員会を開き，今後の予定を確認し，以後間違い無く 2 月中に叢書を刊行する予定である。

（文責：水野光晴）

東アジア比較文化研究会

7 月 6 日（水）16：30〜17 号館 216 号室（人文学研究所資料室）

報告者：山口建治

表　題：「台州市の『送瘟船』儀礼を見て日本の御霊信仰の成り立ちを考える」

浙江省台州市の「送瘟船」の祭りは，大暑の日に「五聖」（五瘟神）を祭り除災招福を願うものだが，鎌倉の御霊神社の祭礼と類似するところがあるうえ，非業死した「五霊」を疫神として祀る点でも共通している。中国の「五瘟神」の信仰は，御霊信仰成り立ちの謎を解く大きな手がかりになる，と報告した。

本年度は上記の 1 回しか研究会を開催できなかった。活動を活性化していくための方策を，今後模索したい。

（文責：深澤　徹）

言語変異研究

1. 研究内容：言語と社会の関係に関する総合的な研究，今年度は主にポライトネス（言語の対人関係調節機能）に関する調査研究を行った。
2. 論文発表：
   (1)「中国語モダリティの機能体系― Palmer モデル適用の試み」『モダリティと言語教育』ひつじ書房
   (2)「中国語敬語表現の歴史と現状―マクロ的通時論の考察」『社会言語科学シリーズ〈1〉配慮はどのようにしめされるか』ひつじ書房
   (3)『敬語の事典』（共編：敬語の教育，敬語の対照の部分を執筆）朝倉書店

3. 学会発表：
テーマ：現代中国語のポライトネス機能の理論的考察―日本人学習者の母語干渉と“失礼”の困惑
日時と場所：2011年10月30日　日本中国語学会第61回大会　松山大学）
4. 2012年度は言語政策について調査する予定である。

（文責：彭　国躍）

プランゲ文庫研究会

本学図書館が所蔵するプランゲ文庫の新聞，雑誌コレクションの共同研究を目指す本研究会は2009年に学内奨励研究に採択され「プランゲ文庫とアジア」に関連する研究会を積みかさねている。

3年間の共同研究の中間成果は，2012年3月26日（予定）のシンポジウムで発表する予定である。

2011年度の研究会活動の詳細は，共同研究奨励グループ活動報告『戦後，とくにGHQ占領期における在日華僑，在日朝鮮人の生活空間を明らかにする』（研究代表：大里浩秋）と重複するので省略する。

（文責：孫安石）

活字文化の研究

1. 講演会・研究会の開催：2012年2月中（予定）
2. シンポジウムの開催計画：特になし
3. 活動内容
(1)　活字を通じた日本語教育と異文化理解（国際）に関する調査・研究
(2)　活字文化普及のための教育・啓発活動（教育）に関する調査・研究

以上

（文責：松本安生）

モダリティ研究プロジェクト

活動内容

2008年度から2010年度まで神奈川大学共同研究奨励助成金を受けて活動していたが，助成期間が終了し，人文学研究所の研究グループとして活動を続けている。

2011年度は，各自が研究成果をまとめることが活動の中心となっている。

（文責：代表代行　堤　正典）

〈身体〉とジェンダー

〈身体〉をめぐる事象をジェンダー・近代性・権力といった軸で考察していく。

本年度前半は叢書出版にむけての研究会を行った。叢書題名は，『〈悪女〉と〈良女〉をめぐる身体表象』（青弓社）である。

第3回研究会（2011年7月13日：人文研究所資料室）
報告者：クリスチャン・ラットクリフ（外国語学部准教授）
「明治初期における近代化への不安――自由化された悪人，非人，毒婦」

（文責　笠間千浪）

自然観の東西比較

研究会の開催：2011年6月29日（水）
場所：人文研資料室
議題：メンバー構成と今後の活動計画について

構成メンバー
伊坂青司（代表者），上原雅文，小熊誠，坪井雅史，鳥越輝昭，前田禎彦，村井まや子

今後の研究課題について，以下のように確認した。
1. 神と自然についての歴史的・思想史的な東西比較
2. 近現代の科学技術文明についての批判的検討
3. 風土についての比較文化論的考察

各人の当面の研究テーマについて，以下のように

確認した。

伊坂：風土と歴史についての比較思想史
上原：神概念の東西比較――多神教と一神教の対話
小熊：沖縄の風水とウタキ（御嶽）
坪井：捕鯨論争と肉食の歴史
鳥越：ヴェネツィアのラグーナ等をめぐる表象史
前田：災害と飢饉の歴史
村井：ヨーロッパのおとぎ話――グリムの森

今後，年2回程度の研究会・講演会を開催し，シンポジウムも計画することとした。

（文責：伊坂青司）

近代都市の表象

1. 講演会・研究会の開催
   第1回研究会（2011年10月26日）
   第2回研究会（2012年2月29日の予定）
2. シンポジウムの開催
   予定なし
3. 活動内容

本年度後期から，標記の名称で活動を開始した。近代の東洋ならびに西洋の諸都市の来し方もしくは現況について，表象という切り口から分析を試みている。

上記第1回研究会では，個々の成員が関心のありどころを披露。第2回は，鳥越が「〈砂漠〉としての都市―パリ，ラヴェンナ，東京」の論題で研究発表の予定である。

今後，研究会等を積み重ねながら，数年後に人文学研究所叢書を出版することを目標としている。

（文責：鳥越輝昭）

「越境する比較文学」

本共同研究グループの活動の目的と今後3年間の研究計画の概要について討議するとともに，2012年度の本学国際交流事業として採択された以下の事業の詳細について数回検討会を行った。

国際シンポジウム「比較文学の視点からみる改作」（Second International Symposium on Compara-tive Literature: “Reform, Reuse, Recycle: Comparative Literature Perspectives on Adaptation”），並びに国際共同研究プロジェクトのワークショップの開催
（事業代表者：クリスチャン・ラットクリフ）

今年度末までに上記シンポジウムおよびワークショップの詳細を確定し，人文学研究所のホームページに掲載することを予定している。2013年度以降も同様の国際シンポジウムを開催し，その成果を人文学研究所叢書として2013年度を目標に出版することを計画している。

（文責：村井まや子）